

野口 彰*: 蘚類の一属 *Sakuraia* について**Akira NOGUCHI*: On *Sakuraia* Broth., a genus of Musci.

Sakuraia 属はツヤゴケ科 (Entodontaceae) に属し、僅に 1 種サクラキゴケ (*S. macrospora*) を含む日本特産の単型属である。もともとサクラキゴケは櫻井久一氏採集の伊豆日金山産の材料に基づき、Brotherus によつて *Entodon macrosporus* という新種として 1920 年に發表されたものである。その後 1925 年に Brotherus は本種が *Entodon* 属の他の種と大變異つているというので、本種只一種のために *Sakuraia* という新属を設けるに至つた。その際 Brotherus が強調した點は次のように思われる。

1. 蒴胞が丸味をおび、従つて蒴口は蒴胞の大きさに比較すれば小さいということになる。

2. 胞子が大きく、徑 $45\sim 50\mu$ に達する。

この二つの點について検討してみると、まず蒴胞が丸味をもつことは *Entodon* 属の他の種には見ないことである。尤も丸いといつても、*Bartramia* 属などの種にみるような眞の球形でなく、外形は廣楕圓状といつた方が適切かも知れない。多くの蒴胞のうちには、こんな形のほかに長楕圓状のものも混つている。一方 *Entodon* 属の多くの種のうちには、蒴胞の形が長い圓柱状のものから、*E. pilifer* Broth. et Par. などにみるように、短い圓柱状乃至は楕圓状のものまである。してみると、この種で蒴胞の形が属を別にする程の價值があるか、どうかということが問題になつてくる。

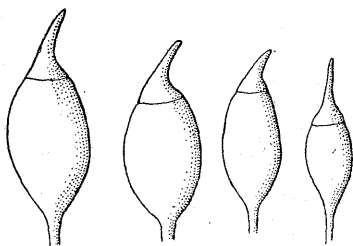


Fig. 1. Capsules of *Sakuraia conchophylla* $\times 10$ (from Mt. Hōngu, prov. Mikawa, Honsyu)

第二の胞子の大きさについては、筆者は基準標本について測定する機会をもつていないが、原記載には徑 $45\sim 50\mu$ とある。高木典雄氏は三河本宮山で採集された本種を筆者に恵まれたが、この標本はよく熟した子囊體をつけたものである。これについて測定してみると、胞子は徑 $30\sim 42\mu$ という具合に變異があるが、Brotherus の示した $45\sim 50\mu$ よりは小さい。形も亦球形から類球形、多角形、卵形という具合に變異性が強い。*Entodon* 属

やその近似種では胞子の大きさが 20μ 以下のものが多い中に、*E. pilifer* の如きは $18\sim 22\sim 30\mu$ の大きさを示し、又 *Actinostoma japonicum* Reim. et Sak. では 30μ となつているので、夫々サクラキゴケの小形のものの大きさに接近してくる。

* 大分大學學藝學部 The Faculty of Liberal Arts, University of Oita, Kyusyu.

** 文部省科學研究費による研究

このようにみえてくると、*Sakuraia* 属の獨立性は弱いものになつてくる。上に記したように、高木氏はよい材料を得てその圖*を公表された。その蒴齒の圖は蒴齒の内部の

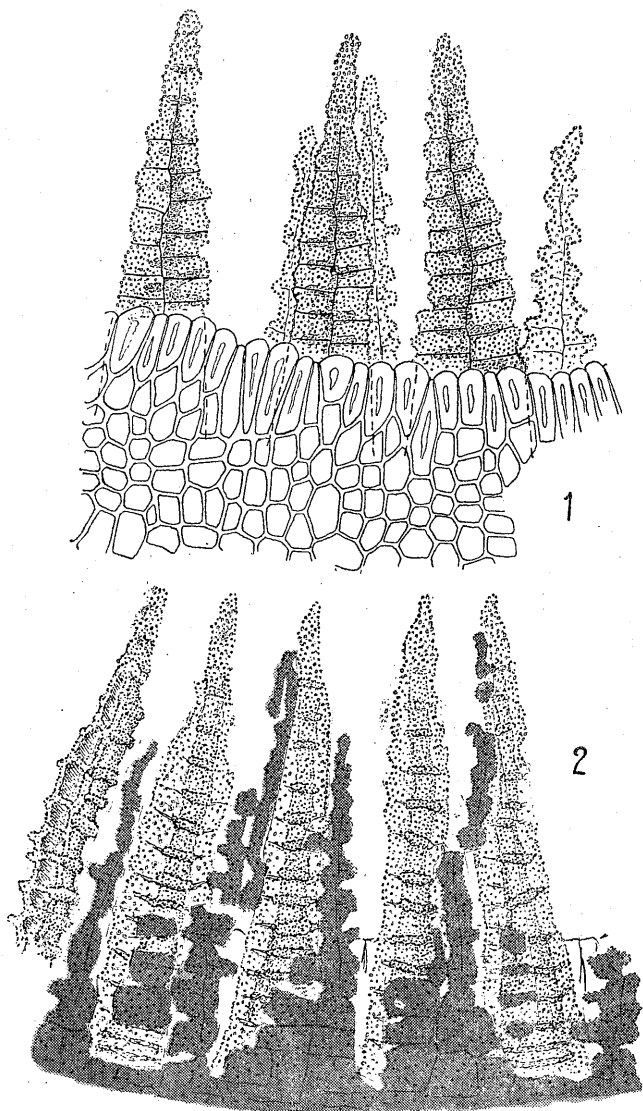


Fig. 2. Peristome teeth of *S. conchophylla* $\times 200$ (from Mt. Hongu)
1. dorsal view, 2. ventral view.

* 植物研究雑誌, 第23巻, 6頁, 2圖 (1949)

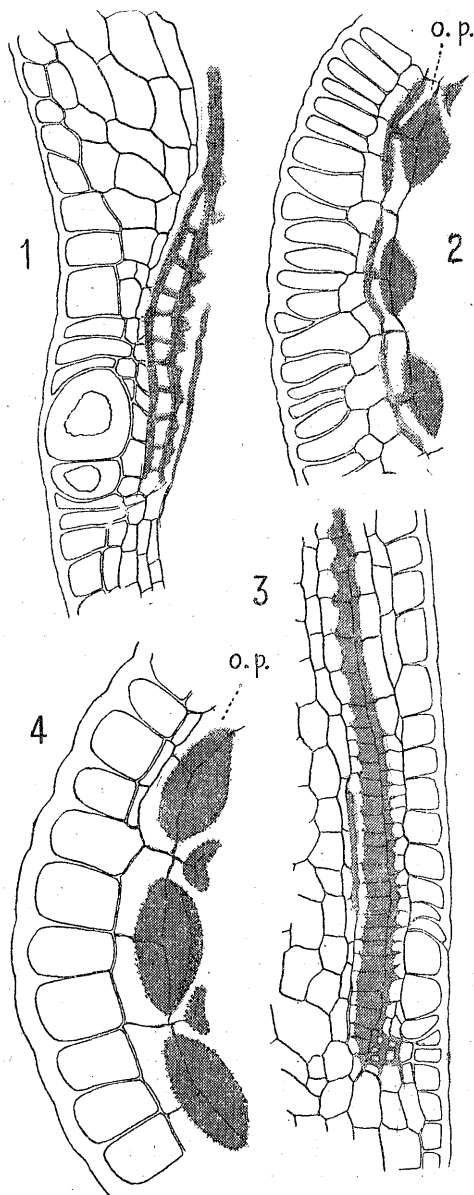


Fig. 3. Section of young lids showing the peristome teeth. 1, 3, radial sections, $\times 208$. 2, 4, transverse sections ($2, \times 205$. $4, \times 387$). 1, 2, *Sakuraia conchophylla* (from Mt. Kaimon, prov. Satuma, Kyusyu), 3, 4, *Entodon challengeri* (from Tenzinyama, prov. Bungo, Kyusyu).

構造が示されているようで、筆者の外蒴齒の表面をあらわした圖 (Fig. 2 の 1) とは一見違っているかのように見えるが、之は外蒴齒の構造が複雑であることを示すにすぎない。サクラキゴケはあまり多くは採集されていないが、たまたま新敏夫氏は筆者の依頼に應じて、薩摩開聞岳で適当な若さの子囊體を得て下さつて、筆者はかねてからの疑問であつたこの外蒴齒の構造を明にすることが出来た。

Entodon 屬の種では *Diplolepideae* 型式の蒴齒發生をなして別に特異性は見られない (Fig. 3 の 3, 4)。サクラキゴケでは蒴齒發生の點では *Diplolepideae* 型式であるが、ただこの種では一細胞層である外蒴齒原組織 (Fig. 3, o. p.) の外側の膜にも、殆ど全齒長に互つて肥厚がおこつて、所謂、前蒴齒が形成されている。前蒴齒と外蒴齒との連絡は外蒴齒原組織の放射方向の膜のうちで、一つおきの膜 (即ち外蒴齒の中央線としてみえる膜) にだけ肥厚がおこる。それで蒴蓋部の横斷では前、外蒴齒はエ字形に見え (Fig. 3 の 2)、放射縦斷面では梯子状に見える (Fig. 3 の 1) 結果となる。尙、外蒴齒の内外の薄板はよく發達しているが、この點は *Entodon* 屬のうちでも、*Entodon pilifer* や *E. perichaetialis* Nog. et Toy. にも見られ、*E. pilifer* では前蒴齒も

弱いながら発達しているが見られることもある。

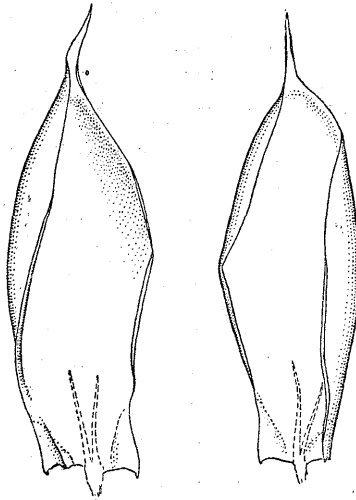


Fig. 4. Leaves of *Entodon conchophyllus* × 32.
(original specimen from Isl. Sakurazima, prov. Satuma, Kyusyu, leg. U. Faurie, no. 1262).

このようにみてくると、前蒴齒の有無が屬を別にする程の價值があるかどうかは、尙問題として残るかも知れないが、比較的弱いように思われる多くの屬が認められている蘚類分類の現段階では、上記の諸性狀を綜合して、*Sakuraia*屬を認めておくのが妥當と思われる。

次にサクラキゴケの種名になると今一つの問題がある。Brotherus が *Entodon macrosporus* を發表するに當つては、蒴胞や孢子の性狀を強調して、*Entodon* 屬の他の種との關係にふれていない。ところが Brotherus の發表以前に公表されている櫻島産の *Entodon conchophyllus* Card. (ナガハツヤゴケ) は不實の標本に基くものであるが、配偶體の點では *E. macrosporus* と何等違っていないので同種と思う。従つて學名としては *Entodon conchophyllus* を用いて、次のように整理の必要がおこる。

***Sakuraia conchophylla* (Card.) Noguchi, comb. nov. (Figs. 1~4)**

Entodon conchophyllus Card. in Bull. Soc. Bot. Genève, 3: 286 (1911).

E. macrosporus Broth. in Övers. Finsk. Vet.-Soc. Förhandl. 62: 27 (1919~20), syn. nov.

Sakuraia macrospora (Broth.) Broth. in Engler & Prantl. Nat. Pflanzenfam 11: 392 (1925). Reim. & Sak. in Bot. Jahrb. 64: 553 (1931), Sak. in Bot. Mag. Tokyo, 48: 395 (1934), Takaki in Journ. Jap. Bot. 23: 6, f. 2, (1949) syn. nov.

Hab. On the bark of trees in the higher regions, Distr. Endemic to Japan.

Specim. exam. Honsyu: prov. Mikawa -Mt. Hongu (N. Takaki, no. 5266 Dec. 1948), prov. Kii (ex herb. E. Ihsiba). Kyusyu: prov. Higo -Mt. Itifusa (ca 1200 m) (A. Noguchi, no. 1281, Aug. 1930), -Mt. Yatake (A. Nog. no. 5071, Aug. 1931), prov. Hyuga -Mt. Wanituka (ca 1000m) (A. Nog. no. 1213, Aug. 1930), prov. Osumi -Mt. Takakuma (ca 800m) (A. Nog. nos. 7723, 7744, Aug. 1931), prov. Satuma -Isl. Sakurazima (U. Faurie, no. 1262 -typus of *Entodon conchophyllus*), -Mt. Kaimon (T. Sin, no. 6026, Nov. 1949).

内蒴齒は *Sakuraia* 屬では基礎膜が可成り高いと思われるが、熟した蒴胞では破片状になり、又外蒴齒の内面にも破片状の内齒が附着することが多く、processus も一定の形をとらずに不規則になりがちである。尤もこの點は *Entodon* 屬にもみられることである。

本種は日本の太平洋沿岸に沿つた高所に分布し、配偶體の似た別の種 *Entodon pilifer* が濟州島から裏日本の高所を縫つて、羽後まで知られているのと、よい對照をなしている。